

令和6年度

社会人特別選抜試験問題

|                  |                                                   |     |
|------------------|---------------------------------------------------|-----|
| 保健福祉学部<br>保健福祉学科 | 看護学コース<br>理学療法学コース<br>作業療法学コース<br>コミュニケーション障害学コース | 小論文 |
|------------------|---------------------------------------------------|-----|

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 2 問題冊子（8頁）には、解答用紙（3枚）及び下書き用紙（1枚）が挟み込んであります。試験開始の合図があったら、直ちに中を確認、印刷や枚数の不備などがあった場合、監督者に申し出なさい。
- 3 問題冊子の間に挟み込んである解答用紙を取り出して、すべての解答用紙の所定欄に受験番号を記入しなさい。
- 4 解答は、すべて解答用紙の所定欄に記入しなさい。
- 5 句読点は、1字と数えなさい。
- 6 試験室で配付された問題冊子及び下書き用紙は、退出時に持ち帰らなさい。

このページは白紙です。

このページは白紙です。

課題文を読み、後の問いに答えなさい。

【課題文】

(1) リスクという言葉にはさまざまな定義があるが、個人や組織の目的実現に影響を与える不確実な事柄を、その発生の確からしさ（頻度や確率）と、結果として発生する被害の大きさという、二つの要素を組み合わせて表現されることが少なくない。私たちは、身の回りにある多様なリスクの重要度を判断・対処しながら、日々の生活を営んでいる。社会学者ウルリヒ・ベック〔1998〕はこのような現代社会のあり様を、「リスク社会」と表現した。

しかし古くから人間社会は、地震や津波、台風や風水害、疫病や飢饉<sup>ききん</sup>など、さまざまなリスクと対峙<sup>たいじ</sup>してきたことも事実である。その意味でリスク社会という描写は、現代社会に特化した状況を指し示すものではない。災害への備えや医療技術の進展、日常的な栄養・衛生面を考えればむしろ、現代社会は過去と比較してリスクに満ちあふれた世界ではないのである。それにもかかわらずベックはなぜ、「リスク社会」という言葉を用いて、現代社会の課題を指摘したのだろうか。

ベックは、現代社会には従来とは決定的に異なる性格があると述べている。それは現代社会におけるリスクは、人間社会の外部からやってくるものではなく、「人間が歴史的に獲得した能力」、言い換えれば「地上の生命体の再生産の基盤を人間が勝手に変えたり、つくり上げたり、破壊することができるようになったこと」によって発生するものへと、変化したということである。科学技術の進展により人類が獲得した能力こそが、リスクの原因とされているのである。

また、(2) 人類が獲得した科学技術の力は、人びとが、リスクによりもたらされる被害を受け入れざるを得ないものとしてではなく、回避やコントロールが可能なものと理解することにもつながっていった。

たとえば、自然災害による被害は、かつては自然現象であり、また被害に遭遇することもある種の運命として人びとが受け入れていた。しかし今では、ダムや堤防・護岸の整備状況、精度の高い気象予報システムの開発と運用状況、適切な避難に関する意思決定などによって大きく左右されるものである、と私たちは考えるようになっている。つまり、科学技術が進展したことで自然災害は、人間の

意思決定の帰結としてもたらされるもの、言い換えるならば、適切な意思決定により被害を回避・軽減することができるもの、と考えられるようになってきたのである。

一方で災害対策のためとはいえ、無尽蔵に人員や費用（税金）が使えるわけでもない。学校教育の問題、医療・介護の問題、道路や鉄道などの社会インフラの整備や維持など、地域に限定したとしてもさまざまな社会問題が存在し、そのどれに優先的に取り組むかという意思決定は自明でない。また、災害時に有用な避難対策や治水設備の整備は、日常の生活を不便にしまう場合もある。災害だけに限定して考える場合でも、想定される被害の程度と、備えに必要な費用や受け入れられる不便さを天秤にかける必要がある。

そしてその天秤がどうバランスをとると判断するかは、それぞれがおかれた状況や経験により異なるため、多様な意見をすり合わせ、どの価値を優先していくべきかを定めることが求められるのである。だからこそ、科学技術をめぐる諸問題の解決には、その問題に直接たずさわる専門家だけではなく、さまざまな立場の人の参画が求められるようになったのだ。

しかし社会のなかで争点となる複雑な問題を読み解き、適切な解決策を導き出すためには、科学技術を含むさまざまな専門知が必要とされるため、それらの問題解決は、専門家に委ねるほうがよいという見方が根強い。そうしたなかで、市民が問題に向き合い、対処策を導き出すための議論に参加するという方法論にはどのような意味があるのだろうか。

一つには、(3) 科学技術をめぐり社会のなかで生じる問題が複雑化すると同時に、そのリスクの評価の不確実性が高まってきたことにより、意思決定の仕方が変化してきたことがあげられる。新型コロナウイルス感染症をめぐる諸問題、気候変動問題に向けた脱炭素社会への移行、ゲノム編集技術の社会導入、AI 技術の活用方法、それらのどれをとっても各分野の第一人者とされる専門家のあいだですら、リスク評価についての意見が対立し、判断に迷う事態が起こっている。専門家に「正解」を求めることができなくなっているのである。

また、科学技術が使われる場面によっては、専門家よりも、問題の影響を受ける市民や当事者のほうが、何が最善の選択なのか、どのような価値が優先されるべきであるかについてよく知っているという状況も起こりうる。たとえば、災害

リスクの高い地域での防災対策を決定する場面や、先端科学技術を農作物栽培に応用する場面などがそれにあたる。そのような状況において、市民の声を十分に聞かないままに専門家主導で政策を決定し、人びとに多大な被害を与える結果を引き起こしたとき、人びとは政府や専門家に対してどのような想いを抱くだろうか。

福島第一原子力発電所の事故のあとに、原子力発電をめぐりさまざまな不信や不安が噴出した背景には、その被害の甚大さもさることながら、なぜ最初から自分たちに相談してくれなかったのか、なぜ立地地域の実情や市民生活のことを詳しく知っているわけでもない専門家だけで、そんなに大事なことを判断したのだ、という憤りの感情が強くあったのだろう。

このような状況のなかでより強くその必要性が <sup>うた</sup>謳われるようになったのが、「市民の科学技術への関与（PEST：public engagement with science and technology）」という考え方である。その源流は1990年代後半の欧州にまでさかのぼることができる。

その当時英国では、遺伝子組換え作物をめぐる問題について、専門家こそが「正解」をもつという想定に基づき、政府や専門家が一方的な情報発信や対策を行ったことに対する社会の厳しい目が向けられるようになっていた。人びとは、遺伝子組換え作物を社会のなかでどう取り扱うかの決定を誰がしているのか、利益を得るのは誰か、予見できない悪影響があった場合に、その責任は誰が負うのか、ある国での利益が他の国の不利益につながるのか、現世代の利益を優先させることにより、将来世代が不利益を被ることはないのか、など幅広い観点からその評価のあり方をとらえはじめていた。

つまり、次のように考えられるようになってきた。科学（やそれを担う専門家）は、客観的であり、社会のなかの価値判断からは自由であるという前提を採用することができない問題が存在する。そうした問題については、何が問題となっているのかについて理解を共有し、同時に、解決するということが何を意味するかについての共通イメージを、多様な立場や価値や知識をもつ人どうしが集い、話し合い、一つずつつくり上げていく必要がある。

遺伝子組換え作物論争の教訓として英国政府がまとめた報告書には、次のよう

な一文がある。

この論争は安全性に関するものではなく、どのような世界に生きたいと欲するかという、はるかに大きな問題に関するものである。

[House of Lords Select Committee on Science and Technology 2000]

現在にも共通する、そして私たちが考えなければならない究極の問いとは、「どのような世界に生きたいと欲するか」という問いであると、言い換えることができるのではないだろうか。

遺伝子組換え論争にひきつけて言えば、遺伝子組換え作物をつくるのか／つくらないのかという問いかけは、専門家が考えたリスクを許容するか／否かという問いかけには収斂<sup>しゅうれん</sup>しなかった。世の中の人びとが、遺伝子組換え技術の発展に何を期待し、何を懸念しているのか。遺伝子組換え技術を使うことにより、私たちの食生活はどのように変わるのか。そしてそのとき、社会はどのように変わるのか。そればかりではなく「遺伝子組換え」という、これまで人類が手を出すことができなかった未知の領域に足を踏み入れるということは、どのような世界をかたちづくることにつながるのか。

この問いかけの「正解」は、専門家ももち得ない。正確には「正解」は存在しない。その解は、専門家や産業界、政策担当者だけでなく、一般の市民も含めた多様な人びと（みんな）で、直接・間接に議論し、この問題に対して熟慮し、各々が期待と懸念を言葉にして、共有していく参加のプロセスによってしか導き出されないのだ。

出典：堂目 卓生、山崎 吾郎編著『やっかいな問題はみんなで解く』、世界思想社、2022 年

- 【問１】 下線部（１）の「リスク」はどのように表されると筆者は考えているか、50 字以内で述べなさい。
- 【問２】 下線部（２）「人類が獲得した科学技術の力」によって、自然災害による被害に対する考えはどのように変化したか、120 字以内で述べなさい。
- 【問３】 下線部（３）「科学技術をめぐり社会のなかで生じる問題」をどのように解決したらよいか、課題文の内容を踏まえて、具体例を挙げてあなたの考えを 500 字以内で述べなさい。